

地方点描

給食の楽しさ

「コロナ禍は収束したが(校内で時折)感染が広がることもあって給食は前を向いて食べることが徹底されている。今小学校にいる子どもたちは給食をグループで食べることを知らない」

7月30日に能代市役所で開かれた市食育推進会議で委員を務める小学校校長の発言にはとした。

2023年5月に新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行して3年以上が経過している。最近では特段の持病がなければ重症化するリスクも減ったためか、県が発表する感染症週報でもコロナの患者数はすっかり目立たなくなった。社会は段階的に流行前の状態にほぼ戻ったものだと思い込んでいた。

しかし、考えてみれば今の小学6年生は、新型コロナの流行後に入学し、学校生活でもさまざまな制約がある中で過ごすことを余儀なくされてきた。給食時に会話をせずに食べる「黙食」だけではないだろう。子どもたちにとって違和感なく定着した習慣が他にもあるかもしれないと感じた。

会議では、市内で子どもから高齢者まで年代に応じて食育に関わる多彩な取り組みがあると知った。「食育と言えば食材ばかりに目が行きがちだが、食べることが楽しいという雰囲気をつくることも食事の良さの一つだ」という委員の発言も印象的だった。

おいしい料理は一人よりも家族や友人と向き合い、楽しく会話しながら味わった方が記憶に残りやすいだろう。給食で黙食が継続される学校もあるが、クラスの仲間と一斉に食べる給食は、できることならば友達の笑顔が重なり合うものであってほしい。(能代支局長・今井正一) (令和8年8月5日(水)秋田魁新聞より一部抜粋)